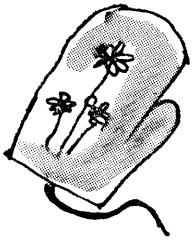
私の保育



島田ななみ

「四十人!! 本当に一人で?」ミセス・モローは全く信じられないといった表情で私を見つめていた。そして肩をすくめて大きな目をさらに開いて「It's terrible!」と言うのだった。

——本当に信じられないはずである。私がミセス・モローの勤めるミシガン州立大学の中にある、デイケアセンターを訪ずれると、そこには、およそ五〜八人の子どもに一人の先生がついているではありませんか。ワイワイした子どもたちがあばれまわっている私のクラスと違って、ままごと・粘土・ブロックなど好きなコーナーに集まっている子どもたちはいたって落ちついているのだ。各コーナーには必ず先生が一人ついているのだが、そこの遊びにはほとんど手を出さず、ただニコニコしながらすわってながめているだけである。私が見学したのは短い時間であったが、積木を一生懸命積んでいる子どもたちも、砂場にいる子どもたちも、破れかけたテントにもぐりこんでいる子どもたちも、物のとり合いやけんかはなく、だからといって先生に依存しているようすもみられなかった。子どもたちがおっとり、いきいきしているように見えたのは私の一人よがりだろうか……。

夏休みが終わり、二学期が始まって、ミセス・モローの言う"terrible"な生活が始まった。

始業式の日、子どもたちはうれしさでいっぱいである。長い休

みの間に会えなかった友だちと久しぶりに遊べるからだ。「ボクね、やまのぼったんだよ」「うみでネェーかにつかまえちゃったんだ。こーんなに大きかったんだからー」「あたしはネ、いなかのおばあちゃんちでほたるつかまえたの」など、子ども同志互いに吸引力があるかのように友だちを求め、話に夢中になり、少々興奮気味であった。

☆ Nちゃん弱虫じゃないよ

翌日からプールが始まった。

私の園では、小学校にあるプールの級を、幼稚園の程度に合わせ、水に親しんでいる度合として、シャワーがこわがらずにかけられる『赤』、顔を水につけられる『白』、もぐることができる『もも』、浮くことができる『青』などの級がある。『もも』や『白』の子どもは、もぐったり浮いたりして「ネェ！　あたしもぐれるの、先生みてみて！」「先生、きょうボクに『青』くれる？」「あたしもう『もも』？」と意欲満々。他の子の級が上るの見て「ワア、Sちゃんいいなあ、ボクも『青』ほしいな」とうらやましそう。どの子ども一学期のとき以上にやる気十分である。

そんなある日、プールで『白』の子どもたちがもぐったり浮く練習をしているとき、プールサイドから見ていた『青』の級をもっているH夫が、プールに入っているN子に声をかけた。「Nちゃん！　浮かんでみな」。N子はやらないうちから「N子できない」「N子いやだ」と決めてかかることが多い子である。N子は少しためらって、どうしようかなといった表情。プールサイドの他の子どもから「Nちゃん、できっこないよ。弱虫なんだから！」と声がかかった。「Nちゃん、やってみなよ」とH夫が再び言うと、思い切ったようにN子はザブっと水につっこんだ。ほんのちょっとの間だったがN子の体が水に浮いた。「ホラネ！　Nちゃん弱虫じゃないよ！」とH夫のうれしそうな声。N子も水から顔を上げてにっこりした。

子どもたちは友だちのことに敏感である。「あの子はすぐ泣いちゃう泣き虫だ」「あの子はすぐ言い訳する」「あの子は弱虫だ」などと評価している。それを打ち破るには、その本人が、思いきってやってみる努力が必要であり、まわりも、それを促す力を加えてあげる必要がある。四歳に比べて友だち同志のつながりがずっと強くなっているこのごろである。私が「あら！　Nちゃんじょうずに浮けたわネ」と言うより、H夫の一言の方がよりN子にとってうれしかったであろう。友だちを認め、認められるということで、N子もH夫もさらに成長し、こんなところで友だち同志の結びつきが深まっていくのではないかと思われた。

☆ 足がないと思ってるのか？

「オイ！ Y夫。紙もってこい！」「H彦！ ビニール袋もってこい！」最近力を示しはじめた子どもたちは、自分より弱く、言うことをきく子どもたちに対して命令的である。

「あれ？ Aちゃん、誰かに何か持ってきてほしいとき、『もって来い！』って言うの？」と私がきくと、Aはもじもじしながら首を横に振った。

Sは「オイY夫！ ぼくたちの仲間入れ！」とY夫を引っぱっている。「いやだよー」とY夫。「入れよー！」二人で押し問答をはじめた。近ごろSは命令的になって、何でも自分の思う通りにしようとする、思うようにならないので、力ずくになってしまう。力が強いからまわりの子どもたちがこわがって何でも言うことをきいてしまう。といった悪循環なのである。どうしたのかとY夫にきいてみた。

Y「だってボク、仲間に入りたくないんだもん」 T、「じゃSちゃんは？」 S「仲間に入ってほしい」 T「、じゃ仲間に入れ！ って言ったら仲間に入りたくなるかな？」 S「いやだ」 T「じゃ何て言ったらいいかな？」

S（しばらく口ごもって）「仲間に入ってって言えばいい」

Y「そう言ったんだったら仲間入ってもいいけど——」

自分の欲求は通せてもなかなか相手の立場で考えることはできない。

Aはこのごろ T夫に力を出しはじめ「紙もって来い！」「テープとって来い」「クレヨン貸せ！」など、自分は動かずにTに命令する。Tは何も言わずに言われたとおりに動いている。そばにいたKが「Tちゃん！ Aくんに自分で持っておいでって言えばいいんだよ。おまえAくんに足がないと思ってるのか？」と言った。こうしたようすをみていると、命令されっぱなしで、それに何の矛盾も感じないで言う通りになっている子、命令されてもいやなことはいやだと言える子、他の人のことでも「それはおかしい」と言える子などさまざまである。命令されたからといって、自分のやりたくないことをやるのはよくないと頭でわかっていても、その場になると、強い子の命令をきいてしまうことが多い。命令的な子どもには自分だけでなく、他の人のことも考えてほしいし、命令される子には自分の思っていることをはっきり言えるように育ってほしいと思うのだが、なかなか思うように行かず困ってしまうのである。

☆ 一緒に楽しんじゃう

こうして、思うように行かなかったり、やり方に行き詰まったり、何をやってもうまく行かないときがある。そんな時に

は、子どもたちのあれこれ足りない面が目につきはじめ「どうしてこうなんだろう」「私は一体何をしているのだろう」など、自分の力のなさをなげきながら手も足も出なくなってしまう。そんなやりきれない気持ちでいる時、PTA主催の親子読書会があった。これは子どもの本の会の先生をお招きして親子一緒に絵本のよみきかせをしていただくのである。

I先生が「たからものがでてくるよ」といってカバンからそっと出された本は「十一ぴきのねことあほうどり」。はじめて出会ったI先生と子どもたちが、あほうどりのなき声をまねしたり、ネコたちの顔になってみたりしながらぐんぐん引きよせられていくのがわかった。ストーリーそのものもユーモラスなものだが、I先生の楽しい話ぶりに子どももお母さんも先生も一緒になって笑いころげてしまった。

あほうどりの島へ行って次々大きなあほうどりに出会ってネコたちがびっくりする場面では、すわっていた子どもたちが前にとび出して床にひっくり返ったりしはじめた。うしろで見ているお母さんから「○○ちゃん!!」と注意の声が出る。I先生は「いいんですよ、わたし気にならないから」とおっしゃって楽しく話をつづけていかれた。

読書会のあとでI先生とお話しした。「あほうどりが出てくるところで子どもたちがひっくり返ったでしょ。あれは自分がネコになってビックリしてるのネ。ああいう反応が出てくるから幼児はおもしろいわネ」とおっしゃった。私ならあの時どうしていただろう。

「お母さんが注意したりするでしょ、でも私ちっとも気にならないの、子どもと一緒になって楽しんじゃうから」このなにげないI先生のことばに何かハッとするものがあった。このところ注意ばかりが先立って、子どもたちと一緒に楽しむことを忘れていたのではないだろうか。常に注意する方とされる方という関係では、先生対子どもという域を出ないのではないか。もっと人間対人間という同じ基盤の上に立って考えなければいけないのではないか、と気がつきはじめた。

何が terrible かと言えば、四十人という子どもの数ではなく、それだけ多くの子どもたちの先生として、私の〝姿勢〟がいかにあるかということにあると思われた。

毎日の生活に流され、疲れ切った先生であってはいけない。子どもに何か要求する前に、まず自分がやわらかさとあたたかさをもっていたいと痛切に感じるこのごろである。

（港区立東町幼稚園）